大日本蠶絲會報

第四拾壹號

明治二十八年十一月

目次

●論說
◎大日本蠶絲會第一回品評會視察　佐々木長淳
◎「バクテリア」の話　河原次郎
●寄書
◎碓氷社景況　岩淵修三
◎絲況の不味に就て　橋本重兵衛
◎蠶に桑の文字を記するに就て　中村嘉久藏
●統計
◎全國製絲工場調査◎九月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計◎九月中絹布類輸出數量元價統計◎十月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計◎十月中絹布類輸出數量元價統計
●問答
◎繭及蠶の種類に就き質問並に答
●外報
◎佛國蠶絲の狀況並に絲價將來の趨勢◎米國紐育絹並に生絲商況
●雜報
◎大日本蠶絲會第一回品評會紀事◎奈良縣の春蠶產額◎靑森縣の春蠶景況◎島根縣の養蠶景況◎岐阜縣の春蠶景況◎山口縣下の蠶絲業狀況◎大分縣の桑畑段別◎全切繭を防ぐの手段◎信州伊那に機業起らんとす◎蠶絲直輸出奬勵法案◎生絲檢査所の位置◎群馬縣蠶種檢査成績◎廣島縣各郡市養蠶成績◎生絲檢査技師の任命◎橫濱蠶絲銀行發起人總會◎生絲運搬直上げの拒絕

●入會の勸誘を望む

本會は本邦蠶絲業の改良進歩を圖るを以て目的とするものにして創設以來日尚ほ淺きも入會者は陸續として增加し今や已に當初の會員に十倍し栃木、新潟兩縣には支會の新設をも認可するに至り會運は宛も朝暾の昇るが如く駸々乎として隆昌の域に向へり是れ固より有志家諸君が熱心蠶絲業の發達を企圖せらるゝの精神に基くと雖も然れども亦本會が斯業に向つて裨益する大且つ多なるに由らずんばあらざるなり而して其根軸たるべき事業を開發せしむるには本會員の汎く全國に渉りて最多數なるにあらざれは其の効用の多きを收むること難く其の目的を達するに足らざるものあり就ては會員諸君は精々本會へ入會者を勸誘せられんことを希望す

但本會へ入會せらるゝには一ヶ月金拾錢の割合にて一ヶ年分以上の會費を添へて申込まるゝを要す　尚ほ本會規則入用の方は郵便切手貳錢を添へて御申越相成度直に郵送可致候也

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報第四拾壹號

●論說

◎大日本蠶絲會第一回品評會祝詞

左に掲載する祝文は大日本蠶絲會名譽會員佐々木長淳氏が蠶種、繭、生絲第一回品評會審査委員長の資格にて朗讀されたるものに係る

大日本蠶絲會は設立以來日尚ほ淺しと雖も會員は既に一千餘名の多きに達し而して今に同會に加入する者絶ゆることなしと聞く其の會員諸君の如きは多くは蠶絲業の學理に富まれ若くは實業に通ぜられ若くは學理實業の兩者に長ぜられ若くは蠶絲貿易の事業に達せられたる者等にして所謂蠶業界に於ける專門家の一大團體と見做すも敢て不可なきものゝ如し夫れ斯の如く會員諸君は孰れも蠶絲專門家たるのみならず平素研究琢磨せらるゝものなれば世に裨益すること特に尠しとせず且つ本會に於ては數年前より月々一の會報を發行せられ而して會員諸君の蠶絲業に關する論說及び調査研究等の事項は勿論遠く海外蠶事の狀況に至るまで我に益する者あるときは洩さず之を掲げて以て世に公けにせらるゝが故に我が蠶業上種種に於ける成績に於ける製絲に於ける日に月に改善を加へ面目を更めたること亦

多きに在り是れ全く會員諸君の調査研究の周到なるに基きたることと余の信じて疑はざる所なり幸に今般第一回品評會を開設せらるゝの美擧に際し蠶種、蠶繭、蠶絲の優劣を論じ其の品位の如何を調査し其の長を取り其の短を補ひ以て益々蠶絲業改善の資を需められんとす是れ實に改善の資を輸入すべき關門を開きたるものと謂ふべし此の新設の品評會に對し會員諸君の出品せられたるものを審査するに蠶種は一百六十五點蠶繭は一百六十二點蠶絲は二十八點合計三百五十五點を以て算するの多きに及べり斯くの如く夥多なる出品を寄附せらるゝ所以のものは會員諸君の蠶絲業に熱心なるを徵するに足りぬ其の品質の良好なる者の多きは出品諸君が其の伎倆に長ぜられたるを證するに足る是れ余の深く敬服する所なり然りと雖も事物一たび改善せりとて苟くも之に甘んじ以て心を安んずるときは却て退歩を促すの媒となる故に益々進みて改善に改善を加へ愈々努めて其の奥を極め毫も止ることなからしむるは蠶絲業に從事するものゝ責任なり然れば余輩諸君と共に向後一層其の改善に孜々怠らざらんことを期し併せて我が蠶絲業をして蠶業世界に冠たらしめんことを期せん蓋し我が蠶業を改善するの方法は一ならずと雖も今回開設の品評會の如きは此の目的を達せんとするには最も與かりて力あるものとす然らば則ち前きに該品評會は實に我が蠶絲業上改善の關門を開きたるものなりと云ひしは敢て過言に非ざるべし希くは諸君は今後尙ほ其の改善の實を擧げて年々陸續輻輳せられ竟に此の關門を閉るの時限なきに至らしめられんことを聊か無言を陳して祝詞となす

明治二十八年十一月十七日

大日本蠶絲會第一回品評會審査委員長　佐々木長淳

◎「バクテリア」の話

大日本蠶絲會員農學士　河原次郎

「バクテリア」は極めて細微の生物なること候に世人の知る所なれども如何なる小さき生物なるや能く辨ずる者未だ多からず實に「バクテリア」は甚だ小なるを以て研究し難かりしが諸學者の盡力に依り今日は特別の學科を成すに至り蠶業にも大に關係あるを以て其性質の大略を知るは頗る肝要なるべし彼の軟化病即ち「タレコ」と稱する病に罹れる蠶體中にある「ヴィブリオ」及び「ミクロコックス」等は「バクテリア」にして微粒子も亦「バクテリア」中の一種なりと主張する者あり抑も「バクテリア」は動物植物何れに屬するや議論區々なりしが全く植物に屬し菌類に似て其細微なるものとするの說大に勢力を得て本邦に於て從來之を黴菌と譯しゝは宜しからず細菌と改む可き由「バクテリア」學者近頃稱へ出し余も之を至當とするを以て以下「バクテリア」を細菌と譯し務めて此語を用ひん

凡そ地球上に生命を享けて生育し繁殖を營む生物には動物と植物とありて動物の食物には必ず他の動物若くは植物の生產したる物を要すれども植物は通常他の生物に依らず無機物を取りて自體を形成するを得植物中菌類及び「ヤドリギ」の如き他に寄生する性質あるものに限り動物の如く他の生物の造れる物を攝取せざれば生長すること能はず「バクテリア」即ち細菌も亦有機物なくんば其生を保つ能はざ

るを常とし無機物より有機物を構成し自己の營養に供して生を營むものは甚だ少しとす細菌には斯かる區別あるのみならず地球上到る處に散在し其種類頗る多きを以て形狀にも亦差違あれども普通の菌類の如く構造繁雜ならざるを以て譬言すれば短冊形にて細長く兩端角立てるものと棒狀にして兩端圓きものと球狀なるものと波狀即ち細長くして體の多少屈曲せるものとの四樣に別つを得然れども現今毎日の如くに發見さるゝ新種類中には尚ほ異形のものあり又同一種類と雖も養料の品質分量溫度の高低に從て形狀大小を異にするものあれば唯形狀大小のみを視て如何なる場所如何なる場合に生じたるかを察せざれば細菌の種類を判定し難し例令へば虎列剌病の細菌は短冊形にして屈曲し一端稍太く特殊の形狀を有するを以て鑑別し易けれども馬の炭疽病を引起す細菌と腐敗せる枯草に在るものとは何れも正しき短冊形なれば顯微鏡檢査のみにては之を區別する能はず其一は炭疽病の徴候ある馬體より取り一は枯草より得たることを知り僅に辨識し得るのみ尚ほ確かに別種たるを證せんには人工培養法を行ひ繁殖の狀況を觀察するを要するなり細菌は種類に因り大小あるのみならず同一種にても事情を異にするに從ひ差を生ずるを以て概言し難く體形屈曲せる種類中には長さ我が一分の百分一に達するものあり其小なるものは球狀の種類中直徑一分の二千分一以下なるものあり斯く大なるものにても百個連續せざれば長さ一分に達せざる位に微細なる故其構造簡單にして卵の白味に似たる物質即ち原形質よりなれる塊に過ぎず然れども或る種類は同じく原形質より成れる纖毛を有し此れを動かすが爲めに運動力あるものの少なからず細菌の繁殖法は自體を二分して二個の新個體となり此二個の菌生長して前と同樣の大さになれば各又二分し四個となる斯く分裂法に依ると原形質の一部固結して體中に一個乃至二三個の種子即ち芽胞若くは胞子と稱するものを生じ母體死し胞子發芽して生長するものとあり而して同一種類にして二樣の繁殖法を兼ね行ふことあり細菌は構造簡單なる上に其繁殖も容易なるを以て忽ち數萬の多きに達せしめ互多聚合して顯微鏡に照して無色なるものにても黄、綠、赤、黑、褐等種類に應じて種々の色を生ずることあり

細菌類は普人畜に害を及ぼすが如く思ふ者あれども必ずしも否らず唯に害なきのみならず極めて効益を與ふるもの亦頗る多し例令へば虎列剌菌、腸室扶斯菌は人體を害するものなれども新鮮なる人糞中に存在する二三種の細菌は決して疾病を釀すとなく其中には腸に於て消化作用を助くるものあり又田畝に有機質肥料を施し作物をして能く生長せしむるは常に土壤中に存する二三種の細菌が此肥料を腐敗せしめて植物の根毛に吸收され易き物質に變化するに依る若し此細菌なくんば人糞廐肥等を用ふるも決して効を現はすとなかるべし納豆中には數種の細菌ありて大豆中の蛋白質物を變じて消化し易き「ペプトン」と稱する滋養物に變ぜしむ又乳酪或は洋製煙草に特殊の香氣を生じ乳、肉、酒其他諸種の有機物を腐敗せしむるは細菌の働きに外ならず鑵詰は即ち此理に基き食物に附着せる細菌を煮殺し鑵中に入れ再び煮沸して迅速に鑵の一方にある小孔を塞ぎ空氣中にある細菌の侵入を防ぎ以て鑵中の食物

を腐敗せしめざらしむ又創傷の膿汁は此所に細菌の繁殖するに因るを以て石炭酸を注ぎて之を殺滅し、綿織絲にて覆ひ新に細菌の附着するを防ぐ細菌は前に述べたる如く微細なるを以て僅少の間際あるも空氣に浮べる時に之を通過し得れども獨り木綿は否らず故に細き玻璃壜又は試驗管及び木綿を高度に熱して速に腐敗し易き牛乳或は肉類を入れ此木綿にて堅く栓をなし置くときは久しく安全に貯ふるを得べし空氣は自由に木綿を通過し得るも細菌及び普通の微は木綿の表面に止り內部に入る能はず實に奇妙なる性質にして天若し細菌類に此性を附與せざれば吾人は細菌に就き研究すること能はざるべし」

軟化病の源因は學說未だ一定せざれども食慾なく體を伸長して背部凹み第十一節の肉角著るく後方に傾き明かに軟化病と認め得る蠶兒の胃中には二種の細菌あり一は球形にして一は長方形即ち短冊の如き形をなせり前者は學術上「ミクロコックス、ポンピシス」と云ひ形狀圓く各個分離し或は二個乃至七八個連續して珠數の如くなれるもあり其直徑は蠶體に在る物は凡一分の二千分一にして分裂法に依りて繁殖し運動力を有せず液汁中に浮游して流れに從て移轉するのみ軟化病蠶にして稚れには此細菌を存せず又此病に因りて斃れ體の後部黑褐色を呈するに至り長方形の細菌盛に蔓延せば其跡を止めざることあり此に由て細微の生物間にも生存競爭の行はるゝを知る可し細菌類は斯かる事情にて自滅することあるのみならず自ら毒物を分泌して爲めに自己の生命を失ふの例あり嘗て獨逸國博士「レーヴ」氏は初夏の頃牛肉一片を蓋なき器に容れ置きたるに外部腐敗し其少部分を顯微鏡にて檢査せるに無數の細

菌を認めたり然るに其儘放置し十月頃に及びて其內部を截りたるに依然として新鮮の觀あり更に臭氣なかりしかば此際再び顯微鏡下に照せるに曩きに活潑なりし細菌は一も發見せず同氏は此れ細菌が牛肉を腐敗する際自己に有害なる物質を生じ之れが爲めに死滅し又他の細菌來るも繁殖する能はざるに因ると云へり或る種類の傳染病菌は吾人の身體に蔓延したる時此細菌自身にも有害なる毒物を分泌するを以て一たび其病に罹り幸に快癒して健康に復せる人は毒物を殘存するを以て其病菌は再び繁殖し難しと云ふ斃れ蠶の體中に繁殖したる「ミクロコックス」の長方形の細菌と生存競爭をなし劣敗するは獅子、虎、鷲等の肉食動物が他の動物を捕殺するとは趣きを異にし長方形の細菌に喰はるゝに非ずして前述の如き理由にて自己に有害なる事情起れる爲め死滅することなるべし而して此事情に堪へ蠶兒斃死後も能く繁殖せるものは蠶體全く腐敗し黑褐色の液汁乾燥せる時は風に動かされ塵埃と共に空氣中に浮び越年するを以て蠶室の塵埃中には此細菌を存することあり軟化病蠶に存在する長方形の細菌即ち「ヴィブリオ」と稱するものは分類學上所謂「ヴィブリオ」に非ずして「バチルス」屬なり其性質は「バチルス、スプチリス」とて枯草其他腐敗有機物に在る細菌に類似し餘は全く此れと同一種なりと信ず形狀長方形にして蠶體中に生ぜるものは長さ一分の千分の二乃至三にして個々分離し或は數十個連續し紐の如き觀を呈す各個分離せるもの及び連續するも三四個に止まるものは前後に運動し特に一個宛のものは頗る活潑にして體の一端を左右に動かし前進して或は著るく左右に振らずして圓輪を畫

きつゝ行進し或は一ヶ所に止まり全體を廻旋す前進の際自體を左右に振るを見て歐人は「ヴイブリオ」の名を附したれども學術上正しき名稱に非ず然れども老成して種子即ち胞子を生ぜるものは假令連續せずして各個分離せるものにても運動すること少なし此細菌は分裂法に依りて繁殖する傍らに胞子を形づくることあるを以て紐の如く連續したる各個體中に皆な一二個の胞子を生じ或は胞子の母體より出て發芽したるものあり然れども空氣の得易からざる所にては繁殖し難し此細菌は斃れ蠶のみならず伐採して籠中に在る桑葉の表面にも存することあり此他微粒子病又は創場等の爲めに死したる蠶にも體操用の啞鈴の如き形狀を有せる細菌あれども斃死せざるものには一も發見したることなきを以て健全なる蠶見に寄生する細菌に非ざる可ければ他日に讓り玆に之を省く

●寄書

◎碓氷社景況

大日本蠶絲會員　岩淵修三

近頃閑を得て碓氷社に遊びたり因りて見聞したる景況を記して貴會に報道す碓氷社は群馬縣上野國碓氷郡原市町に本社を設置し碓氷全郡及群馬郡に支部四十四ヶ所を設け製絲共同販賣を專業とし傍ら工業銀行樣の組織なり表面上より視るときは信州の共同揚返所を設け販賣するに同くして他に異なるなしと雖も金融の點に至ては全く相反し甲社員の生絲代豫融金は乙社員に生絲爲換金として融通し更に他の銀行より金融をせざるは全く工業銀行に類似して組織の堅固なる頗る見るべきものあり本年度の製絲高は三千個（九貫目）以上に達すと云ふ實に盛なりと謂ふべし昨明治廿七年一月より十二月三十一日迄の產額は座操絲壹萬八千三百八十貫七十匁此代價七十九萬百三十七圓八十二錢六厘機械絲三千三十五貫五百七十八匁此代價十三萬七千九百八十圓八十壹錢七厘合計二萬千四百十五貫七百四十八匁代金九十三萬七千百十八圓六十四錢三厘にして殆ど一百萬圓の一定なる生絲を產出す抑も該社は當社長萩原鎭太郎氏の首唱に依り明治十一年四月碓部村に創立し碓氷座操製絲社と稱せり該社の業務により舊來の提絲製を改良したる爲めに得たる利益は提絲製に比すれば四割五分餘に達せりと是に於て續々加名者を增し翌十二年に至ては社員の數千九百餘名に達し揚返場十二ヶ所を設置するに至り其餘波隣郡迄にも及びて同一の企をなすものありしと云ふ因て從來の規模を擴張し更に原市町に本社を新設して碓氷精絲社と改稱し社中を區畫して十二組とし各々製絲工場を設けて其事務を分擔し爾來每年隆盛に赴き現今は社員の數二千餘名支部（元組と倉僧したるもの）四十四ヶ所に達し此他去明治十九年來蒸汽機械製絲所を開設し現今に至ては機械製絲所二十ヶ所絲操釜數九百二十三個蒸汽鑵二十二臺を設備し愈ゝ益ゝ隆盛に赴けり明治十七八年頃物價激降の爲め大なる損害を釀し困難を極めしと雖も社員の忍耐遂に今日あるを致したり社長萩原氏が該社創立の目的は舊來提絲製の麁絲濫造を簡易に改良して漸次進歩を圖るに在て當時大に見る所あり人情時勢を酌量し極めて簡易の改良法を實施し實功を奏しつゝ今日に進歩せしめたるものなり萩原氏は昔時頗る好酒家にして片時も酒氣なかるべからずとせり然るに一度志を決したる以上は已に克つ事を知らざれば大志を成就し能はずとして斷然禁酒し一に社運隆盛を期し今日の盛大を致すと雖も未だ一滴の酒を用ひず倍ゝ社員を鼓舞し勤儉怠ちざるは實に製絲家の龜鑑にして賞贊するに堪へたり萩原氏の言に曰く事業は百種の集り合にて不完全極り本社の事業上に就き大方の參考に供するものなし徒に一笑を招くのみ然るに今日迄の隆盛を來したるは當業者諸君の高說を聞

き又實地に當り差支を生じ困却して種々工風を巡し業務を處理したるに由てなり本社の盛なるは百姓仕事としては僥倖なりと云ふの外なし抽者(萩原氏)の如き些少の報酬に甘んじ朝より晩に至るまで社員の奴僕となりて奔走するが故に社員にも幾分か利し幸に今日迄仲買好商等に利益を左右せられず又高利の金員を融通して無利の事業をなさず養蠶をして得たる所の繭を生絲に製造すれば直に金員に代るを得るの方法にして工女の如きも手に製絲の業を習得しあるも何れの製絲器械所に行かねば工賃を得られぬと云ふ不便なく金員の奴婢とならず獨立自由を以て本業に從事せしむるの法にて神主の奥様も御寺の細君も豪家の嬢さんも貧家の娘も共に家にありて養蠶製絲に從事し坐して金員を得らるゝにあり或る一方より云ふときは不完全の虚操や機械を以て區々の製絲を爲し十分の改良を圖る能はずと云ふ實めあれ共十二分改良をせんと欲し多くの固定資本を費し無理なる金融等をなして事業をなすよりも七八分の改良にして十分と云ふにあらざるも各戸の社員安心をして本業に從事し利益を得つゝ漸次進歩せしむる考へなり改良の字は之を解釋すれば正直に品物を製造して利益を多分に得ると云ふとに外ならず云々嗚呼萩原氏の老練なる改良の說實に然り其言や面白し其業や堅固にして盡せり而して確氷社の組織は其同揚返所の各支部を設け支部内の社員の生絲を集め揚返しをなし以て本社に送付す本社は各支部より送付の生絲を送付臺帳寫に照し現品と共に受付係に受付け臺帳寫をば表照係に送付す表照係は審査の上更に受付係に返戻すれば受付係は現品と共に生絲檢査係に送付す生絲檢査係にては檢査員及再檢査員ありて檢査員は光澤類節を檢し以て事務を區分し(アニールは先に揚返所にて檢査す)再檢査員は檢査の誤りあるやなきやを檢査し斯くて生絲品位の區分を確定す既に檢査係の檢査を終れば簿記評量係に送付す簿記評量係は生絲貫目を逐一檢査して記入簿と照合し若し相違あるときは之を改正す台終て絲箱に生絲と臺帳記入寫を入れて評量再調査係に送付す評量再調査係は之を受けて綛絲の付札と臺帳寫と相違あるや無きやを再檢し生絲の等級に應じ絲箱を區分して五人娘、鹿印其他の區分をなしたる上生絲は綛絲係に送付し臺帳は表照係に送付す而して綛絲係は綛絲を綛絲となして結束係に送付す然るに同等級の絲にても動もすれば光澤の差なきにあらざれば結束係に於ては一括中に色澤の異なるものなきやう綛絲の光澤を檢査一定して結束し一括となし等級に依て五人娘、鹿印、南天、金紅葉、銀紅葉其他の商號を付し以て荷造をなすなり又表照係は臺帳の寫を檢し生絲の等級に依り以て生絲代價の等差を定むるなり其方法の精密完全にして取扱の親切堅固なるは萩原氏の言に百姓の集合事業と謙遜せらるれども決して然らざるなり又監理法の克く行はるゝ一切の業務に從事する者は悉皆男子にして女子は只製絲のみに從事する樣見請けたり又社中にて蠶絲業に從事するの家は老幼男女共に非生産的則ち徒食の民なきが如し又前にも述ぶるが如く社業は工業銀行の性質をも含み社員中に富家もあり貧家ありて富家は金融繁忙ならざるが故に生絲を本支社に持參するも爲換金を望まざるのみか生絲の賣却濟みて賣代金の配當を通知するも本社に預け置くは家に貯藏するよりも安心なりとして入用のある迄は本社に預け置くを常とし又乙の金員多忙なる者は本支社に生絲を持參するや爲換金を望むものあり此の場合には甲の預り金を貸與するなり而して甲の預り金には平七分利子を付し乙の貸金には年一割の利子を收入するが故に本社は利子の差に於て格別の損益なく加ふるに瀛車の便あり横濱に出荷するも敢て銀行の爲換を取組む必要なし社中重なる賣産家少しく注意すれば甲乙の金融を爲すを得るとにて本社は少しの手數を勞すれば金融の機關となるを得るなり又生絲を横濱に出荷して賣却の爲め社長自ら出港し絲代金を持參して歸れば銀行に爲換を取組が如きことなく而も又横濱の問屋より金員を借用して餘計の利子や費用を支拂ふが如きことなく一回の出荷に銀行へ爲換取組の手數を要するよりは七八十圓づゝの餘分なる利益なりと云ふ實に萩原氏の精神は確氷一郡のみか隣郡迄にも及びて該社の組織堅固なる他に見ざる所なり嗚呼亦盛なりと謂ふべし

◎絲況の不味に就て

大日本蠶絲會技藝委員　橋本重兵衛

本年は絲況活潑なるべくして而も尚ほ前途に幾多の好望を屬すべしとは曩に九月初旬に於て余輩が幾多の統計的材料に據り確言せし所なり爾來市場の大勢は殆んど余輩の豫言に違はず時に一日一昂一低の浮沈こそ免れざりしも大要凡て好望を以て滿たしつゝありしなり

然るに去月(十月)上旬其形勢遽かに一變して頗りに不況を傳へ市場の光景漸次寂寞となり偶手合となるべき少許の品物殆んど百圓近くの安値を唱ふるものゝ如く從て前途に一層の低落を氣遣ふものゝあらんとす余輩は曩に昂騰編を草して世に公論せし折柄今此の不況に付き聊か責任なき能はず故に今不況の原由を推究めて以て當業者諸氏の參考に供し併せて全く余輩の豫言の適中せざりしには非ずして虞らざる歐洲政治上の動搖のために阻碍を招きたるものなることを示さんとす而して余輩が調査し得たる諸因は率ね左の如し

土耳其の屬國「アルミニヤ」に於て英魯の二國各利害の衝突より端なく紛爭を惹起し殺氣黯澹危機一たび發せば今にも歐洲の平野に激流を漲らせんとせし折柄環視の諸國又虎視眈々暗に此機會に乘じて爲す所あらんとせり即ち彼地商工業者一般稍警戒を加へたる所以にして而して英國の如き當事者丈けに利害の關係甚だ淺からず何となく經濟社會に就々たるものあらんとせし折柄様式の如き何種を問はず一般低落の場合となれり是即ち經濟社會に少恐慌を招きたる所以にして而して其少恐慌も英國丈けに渡及する所至て深く遂に延て歐洲全般の不況となり一般購買力の幾分を減殺したり是れ東洋絲の下落を助成したる第一因なり

過般吾邦にて受取りたる清國償金八千萬兩は全國が擘に佛國に於て公債を以て募集したるものなるが其吾邦へ拂渡すと同時に此多額の硬貨は全然英蘭銀行へ保證預けとなりたるものなり素より金融豊富なる佛國市場のことゝて敢て絶對的に此金額のために市場を擾亂すべき程のものには之れなきも從來流布轉轉しつゝありし所の貨幣を直ちに庫中に投じて其運轉を停止したる結果は一時金融の平衡を失して假令其期間は短日月なりとするも忽ち金融の不圓滑を來たさゝるを得ず均しく逼迫を促し來り現に金利の如き追々上進し來りたり直接の關係ある伊太利の商工業者の如き殆んど狼狽し價格を顧みるに遑あらずして只管貨物の賣却に忙はしきものゝ如くなりし首めに自國に於ける蠶絲を轉賣し更に同商人の手より米國に迄輸出しありし所の蠶絲に至る迄爭ふて賣却せり是れ東洋絲の下落を助成したる第二因なり

前記償金八千萬兩の授受完結するや各均しく此硬貨の吾邦に輸送せらるゝものならんと思惟し忽ちにして倫敦なる銀塊相場を上騰せしめ延いて爲換相場の上進となれり即ち彼の償金授受の前後に於て五十弗以内なりしもの一躍五十四弗半迄昂進し今猶は參着五十三弗前後にあるなり是れ東洋絲の下落を助成したる第三因なり

以上は其下落原因に就いて摘要したるものにして素より余輩夢想だにも考へ及ばざりし所の政治的意味より基因したるものゝ如し而して此三因に就て余の所見を陳ぶれば第一に就ては決して深く留意すべき程のものに非ざるを信ず何となれば土耳其の如き今日は恰も東洋に於ける朝鮮半島の如き感あり從て將來歐洲に於ける交渉問題の難問となるには相違なけれども其主謀者とも評すべき露國の此寒天に向はんとするに際し必須の軍港浦鹽港は凍氷のために閉鎖せらるべく加之過般來東洋の雲行穏かならざるより艦隊の多くは太平洋の沿岸を往來しつゝありて咽喉の急に應援を容さず假令東洋を拋て急に艤裝せんとするも結氷により軍港封鎖のために意を果す能はず僅に自由運動を許すものは地中海艦隊の一部あらんのみ此の不利の地勢に立て如何に魯國無謀なりと雖も豊事を構へんや蓋く後日を待つの外あるべからず是れ余が深く留意すべき程のものにあらずとなす所以なれども其無事安心の點が一般經濟會社に影響し來るべき時期は果して何時なるやは難問に屬す然れども個は是れ要するに短日月

の中にありと云ふことを得べし

第二因たる佛國金融市場のことに關しては是又容易に斷言すべからずと雖も要するに唯一時の變動にして其波瀾は遠からず平穏に歸することなるべく之を從來の例に徴するに恐らくは向後一二ヶ月を出でざることならん

第三因の銀貨相場の如き已に其硬貨は彼地に預入れの儘向後追々必要なる費途に向て支出すべしとなす今日最早其現金輸送の謬見なりしことを悟るも近きにあるべければ又之より生ずる輸進なしと信ず而して米國は全く是等の影響を受けて絲價を低落したるものにして素より全國自らか生絲の需用を減退ならしめて初めて價格の低落を來したるものには非ず即ち伊佛等の工商が盛りに蠶絲の投賣りを爲したる所より一時偶蠶絲市場に困難を受けたるものにして要するに從因なりと謂ふことを得べし而して近來米國に輸出する我絹物の不況に沈淪する所以のものは決して同國の不況に因るに非ずして一兩年來絹物の旺盛に乘じ上州地方の織屋が粗造濫製の絹物を輸出して一時に不正の利を博せんとしたる所より忽ち一般絹物の不信用を釀し遂に今日の澁滯を來したるのみ同地方の如き疾くに織物の本場を以て目せられ其の東洋に於ける里昂なりと迄稱揚されつゝあるにも拘はらず一時不正の利得に眩惑し延いて一般絹物の聲價を失墜するに至る實に痛歎の極とこそ謂ふべけれ之を彼の極めて技術の幼稚なる越前地方の絹物の却て日に其信用を博して販路の旺盛なるものあるに比して豈深く自ら愧る所なしとせんや然るに越前地方の織物の如き之を世界の市場に出して互に精粗優劣を比較したらんには辛ふじて吾邦に於ける河内本綿の地位に立つに過ぎざるものならん而して上州地方の織物たる之にだも若かず究竟するに其技術の巧妙を誤用して吾貿易場裡に一大汚點を止むる輩の如きに至ては余輩は只其無智を嗤笑すべきのみされば米國の如き需用者にてありながら却て相場を低落せしむべき原由とては一もあるなく必ずや蠶絲の如き供給者自身即ち伊佛等の工商が一時金融上の苦痛を免れんために濫責したる結果たるのみ然らば則ち主因たる歐洲の景況回復して少しく活氣を帶び來らんには自ら挽回し得べきのみ深く介意するに足らざるなり

而して以上諸因の消滅すべきときは即ち豫て余輩が稱道したる昂騰論の時期となるべき順序の如くなるも奈何せん已に以上諸因のために肝要なる時機を徒過し幾多の需用を失ひたるにより從て其需用供給の權衡上に非常の齟齬を招きたれば動もすれば攻守其勢を異にし比較上供給剩餘の數を來たさゝるを得ず即ち余輩の豫期したりし高値の自然消滅すべき所以なれども已に前回に於て詳悉せし如く本年度の絲價は實際に安値のものなるにより敢て甚しき下落は無るべしと信ず只前述の事情爲めに或る極端なる高値即ち一千二百圓附近にまで上進すべしと言放ちたる所に對しては眞らざる政事上の阻碍を受て一度び挫折したるにより遺憾ながら此極度の好盛丈は斷念せざるを得ず然れども以上の諸因雲散霧消したらんには本來安値の生絲忽ち多少の回復はあるべければ有名品の一千圓附近は蓋し豫期し得らるべき數ならんか而して其回復の時期に就ては要するに一二ヶ月以後即ち來一月中旬以後にあらんか卿か前日の言の妄ならざる所以を說明し兼て後日の讖となす

◎蠶に蚕の文字を記するに就て

大日本蠶絲會員　中村嘉久藏

蠶には蠶の文字を以て至當とす然るに何時の頃よりか蚕の文字を記し來るは如何なる故なるや蓋し蠶の畧字の如く相見へ書少なく記するに渉かの行くより便利之を假用し來る者ならん然れども蚕は音にてテン訓にてミヽヅなれば離れしも養蚕を養テンと讀まず又ミヽヅを養ふとは云はず矢張養さんと讀み又かいこを養ふと云ふ字義の論は暫く之を措き上述の如く音より讀む訓より云ふも不都合にて當はまらず恰も虎の代理に猫を出したると一般なれば知らずして記するは避くべからざる所と雖も知て記するは意に忍ぶべけきことならんや併し或る論者は蠶は天然の氣候に伴はれて發育するものなれば天の虫にて差支なし只一つの符號と見て可なりと然り元來文字は物の符號なるも蠶をして天然の氣候

にのみ放住して人爲を加へざれば一朝氣候の變遷せば蠶の衛生を保ち難かるべし又一つの符號とすれば成るべく其意義の適へるを要す茲に其物即ち蠶に近き便用適當の符號あり乎は何んぞ今之が因て起りし意を述べん諸君も御承知の如く蠶の一生は普通四十日を以て算ふ之を人生五十年に比すれば人の一晝夜は蠶の一年三ヶ月人の一時間は蠶の十九日人の一分間は蠶の一時十六分に當る實に短命にして僅々四十日を以て一生を終るものなれば天虫と云ふて可なり然れば蚕の字を分解して其上部なる天の頭に蠶く一畫を右より刎ねれば天となり之に虫を添ゆれば即ち蚕となる之を以て蠶の文字に代用すれば飼育中一時間否な一分間たりと雖も忽諸に附すべからざること字義の上に於て明瞭にして隨て取扱ひを鄭重にするの一助たらんか暫く記して看者の一嘆に供す

統計

◎全國製絲工場調査

緒言

本邦の製絲業は其源を農家の餘業に發し規模甚だ狹小なりしも明治の初年に迨び其模範を歐洲に取り大に改良の實を擧ぐるの狀ありと雖も今尚餘弊の其痕を收めざるものあり

熟〻蠶業の狀態を考ふるに世界生絲需給の度は年一年に上進の勢を逞し產出愈增して販路愈擴まるの市況なりしより工場勃興の氣燄盛にして之を去る廿一年の調査に比すれば工場に於て一千二百七十七ヶ所繰釜數に於て四萬九千〇九十七箇を增加せり加之ならず之が增加は概ね機械にありて座繰に增加の僅少なりしは歎ふべきの兆證なりとす左表に就て之を見るべし

製絲工場增減比較表

年度	工場數			繰釜數		
	機械	座繰		機械	座繰	
廿六年	二、六〇〇	六〇二		八五、九八八	一九、一六九	
廿一年	一、五一六	四〇九		三七、三〇一	一八、七五九	
增	一、〇八四	一九〇		四八、六八七	四一〇	

本局は此調査を爲すに方り凡例を擧げ以て廳府縣に照會し之が材料を採收したり而して地方斯業の進否に伴ひ其調査に疎密の慨なき能はずと雖も一朝之が完全を期するは得て望むべからざる事實の存するあるを以て漸次之が完成を期せんと欲す當事者此篇に由りて考案稽査に資せは思半に過ぐるものあらん

明治廿八年十月　　農商務省農務局

凡例

一本表は十人繰以上製絲工場の現況を知るの便に供せんが爲め調成したるものなり

一各府縣製絲工場調査の外更に各地方を總括調成して全國製絲工場の種別等を一見明了ならしむ

一佐賀及沖繩の二縣は此調査に該當する製絲工場の現存するなきにより本表に編入せず

全國製絲工塲

府縣	製絲場ノ別 五百人繰以上 器械	五百人繰以上 座繰	百人繰以上 器械	百人繰以上 座繰	五十人繰以上 器械	五十人繰以上 座繰	十人繰以上 器械	十人繰以上 座繰	合計 器械	合計 座繰	繰湯ノ別 蒸瀛 器械	蒸瀛 座繰	炭火 器械	炭火 座繰	運轉ノ別 瀛力 器械	瀛力 座繰	水力 器械	水力 座繰	人力 器械	人力 座繰	繰籰ノ別 再繰 器械	再繰 座繰	直繰 器械	直繰 座繰
東京	○	○	三	○	七	一	二	二	一二	三	一二	○	○	三	○	○	九	○	三	三	一二	二	○	一
京都	○	○	二	○	四	○	二一二	一○	二一八	一○	二二	○	一九六	一○	一六	○	七	○	一九五	一○	二一八	一○	○	○
大阪	○	○	○	○	三	○	三	七	六	七	四	○	二	七	四	○	○	○	二	七	五	○	一	七
神奈川	○	○	二	一	八	一	六	二	一六	四	一六	○	○	四	七	○	四	一	五	三	一四	二	二	二
兵庫	○	○	三	○	九	○	五三	二八	六五	二八	五○	○	一五	二八	四九	一	五	○	一一	二七	六四	二五	一	三
長崎	○	○	○	○	二	○	○	四	二	四	二	○	○	四	二	○	○	○	○	四	二	四	○	○
新潟	○	○	三	○	四	二	二六	二四	三三	二六	二	○	三一	二六	一	○	三一	二三	一	三	三三	二六	○	○
埼玉	○	一	四	三	三	四	二	二四	九	三二	八	○	一	三二	五	○	二	○	二	三二	七	三二	二	○
群馬	○	○	三	一	一四	三	二六	四四	四三	四八	二八	○	一五	四八	二	○	三三	二	八	四六	四三	四八	○	○
千葉	○	○	○	○	六	一	一一	一七	一七	一八	一○	○	七	一八	二	○	七	○	八	一八	一五	一八	二	○
茨城	○	○	三	二	一八	二	一六	九一	三七	九五	二七	○	一○	九五	一八	○	七	○	一二	九五	三七	九五	○	○
栃木	○	○	一	○	○	二	○	二八	一	三○	一	○	○	三○	○	○	一	二	○	二八	一	三○	○	○
奈良	○	○	○	○	一	○	三	一	四	一	三	○	一	一	三	○	○	○	一	一	四	一	○	○
三重	○	○	○	○	六	○	五八	一七	六四	一七	三二	○	三二	一七	二七	○	七	○	三○	一七	五九	一七	五	○
愛知	○	○	九	○	一九	一	一五五	一四	一八三	一五	六○	○	一二三	一五	五一	○	一九	○	一一三	一五	一四三	九	四○	六
靜岡	○	○	一	○	一六	○	二四	一○	四一	一○	三三	○	八	一○	二一	○	一七	○	三	一○	三八	七	三	三
山梨	○	○	一五	○	三五	○	一九四	七	二四四	七	六○	○	一八四	七	一一	○	一八八	○	四五	七	二四二	七	二	○
滋賀	○	○	四	○	八	○	二三	五	三五	五	二○	○	一五	五	一六	○	七	○	一二	五	三一	五	四	○
岐阜	○	○	三	○	二七	○	四六三	四	四九三	四	一一七	○	一七六	四	七九	○	二三六	○	一七八	四	四八○	四	一三	○
長野	三	○	四四	三	六二	二	三九一	九	五○○	一四	四八五	一	一五	一三	八一	二	三六四	五	五五	七	四八三	一三	一七	一
宮城	○	○	二	一	一○	五	五	一三	一七	一九	一五	○	二	一九	七	○	九	○	一	一九	一四	一九	三	○
福島	○	二	四	四	六	○	一六	八	二六	一四	一二	○	一四	一四	四	○	一五	三	七	一一	一九	一一	七	三
岩手	○	○	一	○	六	三	二二	六	二九	九	一八	○	一一	九	一	○	五二	○	三	九	三五	九	四	○
青森	○	○	○	一	○	○	六	一	六	二	○	○	六	二	○	○	三	○	三	二	六	二	○	○
山形	○	○	三	○	七	○	九九	○	一○九	○	一一	○	九八	○	一○	○	一一	○	八八	○	一○八	○	一	○
秋田	○	○	○	○	○	○	○	五	○	五	○	五	○	五	○	○	○	三	○	二	○	五	○	○

第四拾壹號 統計

府縣廳名	目標	製繰場ノ別 器械	五百人以上	百人以上	五十人以上	十人以上	合計	繰湯ノ別 蒸漲	炭火	運轉ノ別 漲力	水力	人力	繰簍ノ別 再繰	直繰
福井	座繰	全	○	○	○	一	一	一	一	○	○	一	一	○
石川	器械	全	○	○	○	一	一	一	一	○	○	一	一	○
石川	座繰	全	○	○	○	二	二	二	二	○	○	二	二	○
富山	器械	全	○	○	○	九	九	一	一	○	○	九	九	○
富山	座繰	全	○	○	一	八七	一七	一九	一七	○	○	七	七	○
鳥取	器械	全	○	○	○	六	六	一	一	○	○	六	六	○
鳥取	座繰	全	○	○	二	四六	四六	一三	一三	○	○	四六	四六	○
島根	器械	全	○	○	一	六	六	一	一	○	○	六	六	○
島根	座繰	全	○	○	二	一七	一七	三四	三四	一	一	一七	一七	○
岡山	器械	全	○	○	二	一	一	一	一	○	○	一	一	○
岡山	座繰	全	○	○	二四	一七	一九	三四	三四	二	二	一七	一七	○
廣島	器械	全	○	○	二	六	六	一	一	○	○	六	六	○
廣島	座繰	全	○	一	二五	一七	一九	四一	四一	一	一	一七	一七	○
山口	器械	全	○	○	一	六	六	一	一	○	○	六	六	○
山口	座繰	全	○	○	四	一四	一四	一四	一四	一	一	一四	一四	○
和歌山	器械	全	○	○	一	七	七	一	一	○	○	七	七	○
和歌山	座繰	全	○	○	四	一四	一四	一四	一四	一	一	一四	一四	○
德島	器械	全	○	○	一	六	六	一	一	○	○	六	六	○
德島	座繰	全	○	○	四	一四	一四	一四	一四	一	一	一四	一四	○
香川	器械	全	○	○	一	六	六	一	一	○	○	六	六	○
香川	座繰	全	○	○	四	一四	一四	一四	一四	一	一	一四	一四	○
愛媛	器械	全	○	○	一	六	六	一	一	○	○	六	六	○
愛媛	座繰	全	○	○	四	一四	一四	一四	一四	一	一	一四	一四	○

府縣名	目標	工場數 器械	座繰	計	釜數 器械	座繰	計	一少年ノ製造額 器械	座繰	計	一釜ニ對スル製造額 器械	座繰	百斤ニ對スル製造費(平均) 器械	座繰
東京		二三	三	一五	一二四	九六	一二三〇	八四九六〇	一五〇一〇六	一三五一〇六六	七〇	五三一	八八	五五
總計	器械	三三	○○	一一一七	三四九五九	一一一九五四二	二七〇二六〇一	一一九九五四	二七〇二九五九	一四三三五九	五六七	一〇八六六五	一〇一〇五九	二四八二五七〇
合計	器械	三	○	一七	九五九	一一九四二	一四三五九	一九五四	三五七	一八六六五	六七	一〇一〇五九	二四八二五七〇	一一〇三一
北海道	器械	○	○	○	○	一一	二二	○	○	○	○	○	○	○
鹿兒島	器械	○	○	一	一	二五	二五	○	○	○	○	○	二五	二五
宮崎	器械	○	○	○	○	四二	四二	○	○	○	○	○	四二	四二
熊本	器械	○	○	○	一	五	五	一	一	一	一	一	五一	五一
大分	器械	○	○	○	二	五	二五	二	一九	二一	一九	二一	二五	二五
福岡	器械	○	○	○	五	一	一六	三	一六	一一	一六	一一	一六	一六
高知	器械	○	○	○	三	一	一四	一	一	一	一	一	一四	一四
合計	器械	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

府縣名＼目標	工場數		釜數		一ヶ年ノ製造額		一釜ニ對スル製造額（百斤ニ對スル製造費（平均））	
	器械座繰計		器械座繰計		器械座繰計		器械座繰	器械座繰
京都	二八	一〇	二八	三六一八	三一	三、七四九	七、七二六	二、三二五
大阪	六	四	七	一三	四	一〇	四〇七	一、二二七
神奈川	一六	四	一三	二〇	二四	三五六	二五六	三〇二三九
兵庫	六五	二八	九三	一、八七七	三八五	二三六二	四、四四五	五六〇一
長崎	二	四	六	一〇〇	二四	三八〇〇	三〇八九八	一、〇九八
新潟	三三	二六	五九	一、一三七	五三一	一、六六八	二四、二九一	六、三五九
埼玉	九	三三	四一	八〇七	二〇四〇	二、八四七	四三、三六三	八〇、六二六
群馬	四三	四八	九一	一、八六八	一、〇一七	二、九八五	二七、〇二七	一、八七〇四
千葉	一七	一八	三五	五九六	八五一	一、一七七	六八八九一	四九、〇七八
茨城	三七	九五	一三二	一、七七三	一、八七七	三六七〇	三八八〇四	二一、三〇四
栃木	一	四	二〇	三一	二〇〇	六五二	八五二	一七五〇〇
奈良	四	一	五	一二八	一三	二四一	五八三七	二、一一九
三重	六四	一七	八一	一、三四六	二三九	一、五八五	六〇九六一	一七九七〇八
愛知	一八三	一五	一九八	四九七四	三三五	五二九九	一四三六七〇	三八二一
靜岡	四一	一〇	五一	一、六〇〇	一七〇	一、七七〇	九、一二五二	一、七五二
山梨	二四	七	二五一	八、九二九	九二	九〇二一	三二、一五六五	一、一三八一
長野	五〇〇	一四	五一四	二四、八六九	一四、一一九	三四、八三三	四〇、九九五	七、九八三
宮城	一七	一九	三六	一、〇三二	六八三	一、七三五	四〇、〇〇一	一、七〇八
福島	二六	一四	四〇	一、二三三	三、九七六	三九五二	一、七〇四	一、六四七〇
岩手	二九	九	三八	一、〇二三	一、九八八	一、九一一七	二、七〇九	八〇五
青森	六	二	八	七四	二四三	二一七	二、七〇九	九、九六八七
山形	一〇九		一〇九	二、七〇九				
秋田		五	五		六四	六四	六四	
福井	二三	一〇	三三	一〇〇〇	一七〇	一、一七〇	五三、九七三	一四四、二二四
石川	七三	一九	九二	一、一九六	三三四	一、四三〇	二四四、五九	七七、六七六
富山	九七		九七	二四五九			二四五、五九	七七、六七六
鳥取	五四	七	六一	一、五四四	八六	一、六三〇	五八、九六三	七二〇
島根	一九	四一	六〇	八〇四	一、二七五	二〇七九	三二、六三八	一三、八四四
岡山	三三	一六	四九	一、一一一	二八六	一、四〇七	四四、〇〇九	四、四六八
廣島	八	七	一五	五五九	一三五	六九四	二〇、八八〇七	二、七四一
山口	七		七	四〇三		四〇三	一三、九五一	一三、九五一
和歌山	一四	一	一五	四三二	一四	一四九	二〇、四六九	一四、九六一
德島	四		四	一二九	一二九	六〇九四	六〇九四	六〇九四
香川	四		四	一〇五		四〇九〇	四〇九〇	四〇九〇
愛媛	一五	七	二二	五五七	八五	六四二	二二、一一七	七、〇四〇
高知	一		一五		三八七	二八七	七、〇四〇	
福岡	一四	一	一五	一、二九三	二六、一六二	一、三五五、二二一	一、三七五、三四三	五四
佐賀	三五	五	四〇	一、五〇九	一、三四、二一九	四四、八八四三	四二、〇〇一	三一
長崎	二	四	六	一、一三七	一、一七〇三	四〇、九九五	七、九八三	一〇四
熊本	一〇	二	一二	一、〇三三	一、六四七〇	一、七〇四	一、一六二	九五
大分	一〇	二	一二	一、〇三三	一、六四七〇	一、七〇四	一、一六二	九五
宮崎	二八	一四	四二	三九五	一、一四七〇	一、六六三	二、四六八	一一
鹿兒島	二八	一四	四二	三九五	一、一四七〇	一、六六三	二、四六八	一一
沖縄							九九六八七	九
合計	一〇四	四四	一四八	一、二二九	一、一四一	一、三七五、三四三	一、一三九	一〇四

◎九月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計（大日本外國貿易表に據る）

種目	數量	元價	收稅
生絲	七、二一一、九二二 斤	六、一七五、六七五、五八〇 円	一七〇、五五四、二三五 円
撚糸絲	一〇三、一一一	八八、六四五、八五〇	二、四三六、〇二〇
屑絲	一七九、三〇六	一二八、六七七、一〇〇	一、二七〇、八三六
眞綿	四九	六五、一一〇	三、〇九一
計	一、〇〇四、三八八	六、三九三、〇六三、六四〇	一七四、二六四、一八二

◎九月中絹布類輸出數量元價統計（同上）

種目	數量	元價
縮緬	六九 反	一、〇五四、〇七〇 円
羽二重	二六、一七四	三九〇、九九二、五六〇
他の諸絹布類	一二、八三四	一二八、九四〇、九二〇
絹綿布類	二二五	八〇〇、七三〇
絹布手巾	二三五、二四八 打	六四六、七三一、九一〇
絹製品類		七〇、四一九、四四〇
計	三九、三〇二 打一反	一、二三八、九三九、六三〇
	二三五、二四八 打	

◎十月中生絲屑物輸出數量元價及收稅統計（大日本外國貿易月表に據る）

種目	數量	元價	收稅
生絲	六三三、五〇〇 斤	五、四七八、四八一、八三〇 円	一四九、六六四、五一二 円
撚糸絲	二二四、九九六	一八四、五九八、二五〇	五、三一五、五四九
屑絲	二一七、一〇七	一六八、七三三、〇〇〇	一、五三八、七五七
眞絲	一四	四一、二〇〇	九二二
計	一、〇七五、六一七	五、八三一、八五四、二八〇	一五六、五一九、七四〇

◎十月中絹布類輸出數量元價統計（同上）

種目	數量	元價
縮緬	六一二反	八、六一六、八〇〇円
羽二重	四三、九五〇	七一六、三三六、七八〇
他の諸絹布類	七、二二〇	五三、四七一、一七〇
絹綿布類	一、四七五	四、六三〇、五七〇
絹布手巾	二三二、六七六竹	六四五、九七三、三一〇
絹製品類		一〇二、三八五、三四〇
計	五三、二五七反 一三二、六七六竹	一、五三一、四一三、九七〇

●問答

◎繭及蠶の種類に就き質問

埼玉縣蚕糸試驗場朝日村大字荒川
大日本蠶絲會通常會員　細井德藏

(一)長形の繭は絲尺長くして細く短形の繭は絲尺短くして太しと之れが試驗表あらば示されたし

(二)掛合せ蠶種の害は如何なる理に因るか教示を乞ふ

(三)蠶種を一見して雌雄を知るの法なきや

(四)最も精美なる生絲を得んには蠶の何の種類を以て適當とすべきや若し數種ありとせば繰絲易く飼育亦易きものを一二種示されたし

答　大日本蠶絲會技藝委員　芝山直清

(一)試驗の成蹟數多あれども農商務省農務局蠶業試驗場の試驗成蹟を掲ぐれば左表の如し

繭形	絲長	繊度（デニール）	四百間に對する繊度（デニール）
赤熟長短	八〇〇	五、九〇	二、九五
	五七〇	四、五六	三、二〇
青熟長短	六二〇	四、二六	二、八一
	四七〇	三、二四	二、七六
小石丸長短	五三〇	三、六三	二、七四
	四七〇	三、九五	三、三六

(二)掛合蠶種は繭形繭皮及絲質を變ぜしむるに由り不注意の掛合は繭形絲質等を雜駁ならしむるの害ありと雖も蠶種改良上の捷徑は亦掛合にあり

(三)蠶種を一覽して雌雄を知るの方法あるを聞かず然れども強て之を知らんと欲せば重量に由りて比較せば可ならん

(四)絲質精美にして飼育容易なる種類は先づ小石丸若くは又昔の類ならん

●外報

◎佛國蠶絲の狀況竝に絲價將來の趨勢

昨二十七年七月より本年六月に至る一箇年間佛國に於ける蠶絲需要供給の狀況竝に絲價將來の趨勢に關し里昂駐在帝國二等領事山田忠澄氏より去月五日附を以て左の如く報告ありたり

前期一箇年間佛國に於ける蠶絲需要供給の狀況を考究し次に當期即ち本年七月より來年六月に至る一箇年間に於ける絲價の趨勢如何を卜察し以て本邦蠶業社會の參考に資せんとす

佛國製絹業用原料蠶絲一箇年の供給高は內地の蠶絲製產高と外國產絲の輸入高とを對照せば容易に之を概算することを得べし依て試に前五箇年に溯り政府の調査に係る佛國繭收穫統計年表に據り年年內地の生絲製產高を概算するに左の如し

佛國內地生絲製產高

明治二十三年	六五〇、〇〇〇	瓩
同二十四年	五六六、〇〇〇	
同二十五年	六〇八、〇〇〇	
同二十六年	八五〇、〇〇〇	瓩
同二十七年	八七五、〇〇〇	

外國產絲一箇年の供給高は稅關統計年表に據り每年七月一日より翌年六月三十日に至る一箇年間の蠶絲輸入を較査し其差を以て之を算定することを得べし乃ち左に表示するが如し（表中千基を以て單位とす）△印あるは輸出超過を示す）

外國生絲輸出入高

年次	輸入	輸出	輸出入超過
自明治二十三年至同二十四年	一期　四、六一二	一、六五〇	二、九六二
自同二十四年至同二十五年	一期　五、一一四	二、〇六一	三、〇五三
自同二十五年至同二十六年	一期　五、五六二	二、九二八	二、六三四
自同二十六年至同二十七年	一期　五、六〇四	二、二〇六	三、三九八
自同二十七年至同二十八年	一期　五、一三二	二、六六六	二、四六六

繭絲輸出入高

自明治二十三年至同二十四年	一期　二一五	三三四	△一一九
自同二十四年至同二十五年	一期　二二六	二五一	△二五
自同二十五年至同二十六年	一期　一一六	二四五	△一二九
自同二十六年至同二十七年	一期　六七	一六〇	△九三
自同二十七年至同二十八年	一期　五六	三四九	△二九三

前記蠶絲輸出入の外尙ほ繭の輸出入をも計算せざれば蠶絲の供給高を求むるに其實數を得難しと雖も輸出入繭の量たる本編計算の大體を案ずべき程の多數ならざるを以て計算の錯雜を省き玆に之を略し前五箇年佛國に於ける蠶絲供給高を調査するに其結果左の如し（表中千基を以て單位とす）

自廿三年至廿四年	自廿四年至廿五年	自廿五年至廿六年	自廿六年至廿七年	自廿七年至廿八年

	佛國內地蠶絲製產高	外國生絲輸入超過高	合計	然絲輸出超過高	差引供給高
明治廿四年	二、六五〇				三、四九三
同廿五年	二、九六二				三、二一二
同廿六年	三、〇五六			五、六一九	三、五九四
同廿七年	三、〇五三			二、二五	三、一一三
同廿八年	二、六〇八			一、二九	三、〇四八
同廿九年	二、六三四			二、四八	四、一二五
同卅年	三、三八			三、三四一	四、一二五
同卅一年	九五〇			二、四六六	四、一二五
同卅二年	九八			三、二九三	四、一二五
同卅三年	二、八七五			三、〇四八	四、一二五

前表末欄に掲ぐる所の數は即ち需要に對する蠶絲供給高を表するものとす表中より之を左に拔記し參照に便ならしむ

	供給高
明治廿四年	三、四九三、〇〇〇
同廿五年	三、五九四、〇〇〇
同廿六年	三、一一三、〇〇〇
同廿七年	四、一一五、〇〇〇
同廿八年	三、〇四八、〇〇〇

前表を見るに明治二十六年乃至二十七年の一期間は蠶絲供給高例外に高點に達したるも二十七年乃至二十八年の一期は減じて前年の平均高よりも低度に降りたるを徵すべし

是より前期間蠶絲需要の程度を調査せんとするに當り其標準とすべきものは特り里昂蠶絲改所檢査院統計年表に據るの外又他に方法なきものゝ如し然るに同一の荷にして該改所に出入すること必しも一回に限らざれば該統計表たる即か精密を缺く所なきにあらずと雖も稍〻參照に資すべき價値あるを以て今試に前五箇年間該改所の蠶絲檢査高を列擧するに左の如し（表中千基を以て單位とす）

	次	繭	絲	生	絲	計
自明治廿一年至同廿二年	一期	一、八七二、二四七		一、六四四、九四一		二、二一七、三六三
自廿二年至廿三年	一期	一、五八七、九六二		三、〇六四、三		四、五一七、八一九
自廿三年至廿四年	一期	一、六七五、一八七、五五四		二、八四三、九六八		五、二五九、四三四
自廿四年至廿五年	一期	一、九五〇、二二三、九〇五		二、九六三、三三四、六、二九七		二、三一九、五三、二八八、六〇八
自廿五年至廿六年	一期	一、九一七、〇〇六、二六三		二、三四六、一二九、一七八、三九		二、二七三、四一、一九五、二五五

是に由りて之を觀れば蠶絲の需要、換言すれば即ち消費は供給と反對の現象を呈し而して供給の減すると同時に需要は許多の增進を示したるを徵すべし固より前揭の統計を以て直に蠶絲商況の趣向を斷定する能はずと雖も二十七年下半期より本年上半期に至る一期間は里昂蠶絲改所檢査高即ち需要高の前期に比し凡そ一割六分を增し供給高凡そ二割六分を減じたるは該統計に據りて判然たり

前說の如く需要增進、供給減縮の現象は二十七年より本年に至る一期の下半期即ち本年上半期間に於て繰元原料絲の消費劇甚なりしがため古絲の在荷大に減少したりと今日善く當業者の唱道する所と稍稍符合せるものゝ如し

將又本年世界全國の蠶絲製產高は昨年分と稍〻同類なるべしとの說なれば本年亞細亞產絲の輸出に剩餘を告ぐることありとするも本年歐洲及び東方諸國に於ける收穫の不足なるに因りて過不足相償ふべきことなれば大體の局面に於ては供給、需要を超過するが如きことは蓋し之なかるべし

現時蠶絲の需要は依然活氣を保持しつゝあり殊に細絲の如きは使用の途大に伸張の望あるものゝ如し前文說く所の狀態に據りて絲價將來の趨勢を卜察するに現今活況の反動に依りて今後或は一時沈滯す

るが如きことありとするも結局當期間に於て絲價の上進を期するも敢て架空の望ならざるが如し

◎米國紐育絹并に生絲商況　紐育發の特別通信として過般横濱貿易新聞社に達したるものは左の如し

九月　一杯氣候温暖に失して秋物に對する需要を遲延せしめし趣は已に屢々報道せし所なりしが今日に至りても引き續き面白からぬ風情にて所謂十月商賣として繁忙を呈すべき時期なるに係らず商勢豫期の如くならざるがゆへ此邊にして尚ほ幾日を經過するときは失望の聲を高むべきも一般の情勢は好況にして不日盛大なる需要を現すべき豫望あり併し目下の情況はと云へば前文の如く少しく意外の感あることなるが流行の風潮は如何と云ふに相變らず絹物に向ひ居るは隱れなく加之需要の遲延せしは偏り絹物に止らず歐洲各市場にても同樣の形情を現し居るこそ奇妙なり取引の現況此の如しとするも明春の氣配を害するとなきは云ふを俟たざる次第にして譬へば一歩を讓り今秋は此の儘にて冬を迎ふるとするも大勢の上に何等の影響を與ふるとなかるべし一年に於ける絹物消費の割合を概算するに一月より六月に至る時期は七月より歲末に至る半年に倍する趣なれば秋を一杯に測るも僅かに三分の一に過ぎず右の計算、當を得たるや否や知らずとするも普通の絹物を初めリボンは歲の前半に賣れ行くと多く秋に於ては天鵞絨のみ春に比して多數の需要あり、目下立者の先頭に在るものは矢張り紋織にして豫て報じたるが如く明春迄も嗜好を獲るなるべし緞子は總じて景氣宜しきも殊に黑物は好況にて色物亦悪しからず、リボン市場は平穩にして格別のとなし內國機業家は相應に繁忙を見る間に明春の注文を受けたる者少なからず天鵞絨に對する需要は漸次增加し來りしが時候の寒冷なるに隨ひ愈〻面白き商況を示すなるべし

春物　の相場に就ては高直と云を覺悟すれども何れの邊に仕切るべきかと躊躇せし向きもありしが輸入業者の多くは早く見切を附けズン〳〵注文を爲し終りしなり去れば內地向きを營業とするものも先きに進まば愈々高かるべしと考ふるより精々注文を急ぎしが唯困難なるは新拵の注文にして相場の建て方に關し双方迷ひ居る次第も少からず

生絲　市場は靜穩無事なるが相場は鞏固にして毫も低落の氣色を示さず尤も絹物市場の緩漫なるは自然生絲の需要を奬勵する能はざるも去りとて相場を突き落す程の勢力もなし歐洲市場も左迄活潑ならざるも氣配堅固なり唯何れを見ても秋物取引の遲延して花々しき賣行きを看ざるより何となく生絲を見送るに過ぎざるのみ、絹物の狀勢前文の如くなるも亦た絲價の鞏固を助けたる一原因あり尤も是れは永續すべき見込あらざる者なるが所謂銀價の騰貴にして亞細亞各市場に於ける爲換を騰貴せしめ廣東上海等に於ては金を以て打算する直段を上進せしめたり唯横濱にては爲換の上騰を氣掛へ多少賣込直段を引き落さしめしのみにて金を以てする方は其儘なりとの報あり

入荷　本週分左の如し　紡績四十八個、生絲二百十個、屑物三十四個

雜報

◎大日本蠶絲會第一回品評會記事　大日本蠶絲會蠶種、繭、生絲第一回品評會は豫て廣告

せる如く十一月十五日より十七日に至る三日間東京市赤坂區赤坂溜池町三會々堂に於て開設せり今其概況を記せんに出品の數は總計三百五十五點にして其人員は二百七十九名なり外に參考品三點ありたり當に出品の巨多なりしのみならず其品位の如きは概して優等なるもの多きに居り殊に繭に至りては最も精良なるものありて觀客の注目を惹きたり時恰も短日なるにも拘はらず事務員及審査員は非常の勉强を以て事に從はれ出品は十三十四日の二日に陳列を畢り十五十六の兩日に審査を遂げて十七日午前第十時より褒賞贈與式を擧行し仝日午後第一時より小集會を開き蠶絲業に關する有益なる演說數番ありて薄暮に全く閉會せり開會三日間には模本農商務大臣鍋島侯爵及侯爵夫人其他數百名の來觀者あり又出品は悉皆賣約濟となり第一回の品評會としては極めて好況を呈したりき左に出品點數及人員表を始めとして序を逐ひ記する所あるべし

○蠶種、繭、生絲出品點數及人員表

府縣	蠶種 點數	蠶種 人員	繭 點數	繭 人員	生絲 點數	生絲 人員
東京	一〇	六	四	三	三	三
京都	一	一	一	一		
神奈川			四	二		
兵庫			一	三		
長崎			一	一		
新潟	四	二	二四	一八	三	二
埼玉	二九	二三	三三	三三	五	五
群馬	三	二	六	五	一	一
千葉	一	一	五	四	一	一
茨城	八	三	三	三		
栃木	一〇	七	二	二	一	一
三重	二	二			一	一
靜岡	四	三	三	三	一	一
山梨	八	五	二	二		
長野	九	六	一	一	一	一
宮城	五	三	二	二	三	三
福島	二〇	二〇	九	八	二	二
岩手					一	一
山形	一	一	五	五		
福井	四	四	九	八		
石川	二	一			一	一
富山	一	一			一	一
島根	二	一				
廣島	二	一	四	三	一	一
愛媛					一	一
高知	一	一				

福岡	一	一							
宮崎									
鹿兒島									
沖繩									
總計	一六五	一一三		一六二	一三九			二八	二七

○出品蠶種框製、普通製區分表

府縣	框製	普通製	府縣	框製	普通製
東京	五	五	宮城		五
京都		一	福島	三	一七
新潟	一五	二六	山形	一	
埼玉	九	二〇	福井		四
群馬	二	一	石川		二
千葉		一	富山		一
茨城	五	三	島根	二	
栃木	九	一	廣島	一	一
三重		一二	高知	一	
靜岡	三	一	福岡		一
山梨	三	五	總計	五九	一〇六
長野		九			

○出品生絲種類表

府縣	捻造	折返造	島田造	玉絲
東京	一	一		一
新潟	二	一		
埼玉	五			
群馬		一		
千葉	一			
栃木			一	
三重	一			
靜岡	一			
長野	一			
宮城	一	二		
福島	一	一		
岩手	一			
石川	一			
富山	一			
廣島	一			
愛媛	一			
沖繩	一			
總計	二〇	六	一	一

○褒賞等級及人名

褒賞は蠶種、繭、生絲を合して一等賞五點二等賞三十八點三等賞六十三點總計百零六點にして一等賞には賞狀幷に三組木盃二等賞には賞狀幷に木盃一個三等賞には賞狀（會員外には一二等共に賞狀のみ）を贈與せり其等級及人名は左の如し。

（氏名の肩に外の字を付したるものは會員外の符號とす）

蠶種一等賞

埼玉縣兒玉郡兒玉町　青木淺次郎
福島縣伊達郡粟野村　外　池田三之助
計　貳名

繭　一等賞

東京府西多摩郡福生村　高崎治平
靜岡縣志太郡六合村　園田茂一
計　貳名

生絲一等賞

長野縣上伊那郡赤穗村　鹽澤佐七
計　壹名

蠶種二等賞

新潟縣南魚沼郡大和村　鹽谷禎治
埼玉縣兒玉郡金屋村　倉林周平
埼玉縣兒玉郡金屋村　外　倉林鐵五郎
埼玉縣兒玉郡東兒玉村　逸見恒三郎
埼玉縣橫見郡南吉見村　小高保之助
埼玉縣兒玉郡金屋村　清水貞吉
三重縣阿拜郡西拓植村　外　仁保喜內
長野縣上高井郡相之島村　中島波之助
福島縣伊達郡梁川町　高田子之吉
福島縣伊達郡粟野村　外　大內虎之助
福島縣伊達郡梁川町　外　淺野德右衛門
福島縣伊達郡梁川町　外　橫山清次郎
福島縣伊達郡梁川町　外　八零咏右衛門
福井縣坂井郡雄島村　加藤恒藏
福岡縣仲津郡東屋川村　村上保之
計　十五名

繭　二等賞

東京府北多摩郡大神村　外　大野傳兵衛
計　壹名

繭　二等賞

東京府西多摩郡西多摩村　下田伊左衛門
東京府北多摩郡大神村　外　中村半左衛門
新潟縣中蒲原郡吉澤村　小山淳太
埼玉縣兒玉郡兒玉町　田島茂作
埼玉縣兒玉郡兒玉町　外　河田松太郎
埼玉縣兒玉郡兒玉町　外　茂木鎌次郎
埼玉縣兒玉郡兒玉町　外　茂木鐵三郎
埼玉縣兒玉郡兒玉町　青木淺次郎
埼玉縣兒玉郡青柳村　吉澤清作
埼玉縣兒玉郡青柳村　外　木村梅吉
埼玉縣兒玉郡青柳村　外　木村林三郎
埼玉縣兒玉郡青柳村　金井松五郎
埼玉縣兒玉郡金屋村　外　大島富士太郎
埼玉縣兒玉郡兒玉町　外　須永權藏
群馬縣那波郡玉村町　野村要藏
群馬縣北甘樂郡富岡町　佐藤國太郎
福井縣坂井郡大關村　外　田崎市郎右衛門
廣島縣蘆田郡福相村　小野和一
計　十八名

生絲二等賞

靜岡縣庵原郡由比町　鹽月平太郎
愛媛縣喜多郡大洲町　外　河野駒次郎
計　貳名

繭　三等賞

東京府北多摩郡大神村　外　大野善作
新潟縣南魚沼郡大沼村　岡村仁三郎

福井縣坂井郡大關村　石黑新右衛門
計　三名

蠶種三等賞

東京府北多摩郡宮澤村　田村金十郎
新潟縣古志郡長岡町　菊田利右衛門
同　北蒲原郡壟籠村　外　養源社
埼玉縣賀美郡賀美村　塚越武三郎
同　兒玉郡金屋村　谷田松之助
同　北埼玉郡新鄕村　鎗田篤郎
同　秩父郡樋口村　外　野口百太郎
同　北埼玉郡大越村　榎本宗助
群馬縣絲野郡新町　境野清衛
千葉縣望陀郡小櫃村　森國松
茨城縣結城郡絹川村　柴周平
栃木縣安蘇郡昇村　永島禮七
同　足利郡吾妻村　龜田延三郎
山梨縣東山梨郡日川村　外　堀內甚之丞
同　同　上萬力村　外　古屋丹作
長野縣下伊那郡喬木村　市瀨善治
同　小縣郡上田町　外　安藤嘉四郎
同　同　田中良太郎
同　同　外　田中吉右衛門
宮城縣伊達郡角田村　外　手塚善治
福島縣伊達郡富野村　齋藤德三郎
同　同　梁川町　阿久津半藏
同　同　外　八卷長右衛門
山形縣東置賜郡屋代村　石山學太郎
富山縣鯛波郡井波町　外　藤澤五三郎
高知縣高岡郡斗賀野村　田村忠誠
計　二十六名

繭　三等賞

東京府西多摩郡小曾木村　柳內幸助
同　同　外　柳內才次郎
同　同　岩田庄右衛門

同　同　外　市川友之助
同　同　西多摩村　外　下田ミト
同　同　外　島田チノ
同　同　外　下田治三郎
同　同　小曾木村　大越七郎左衛門
同　北多摩郡大神村　志茂芳候
神奈川縣愛甲郡下川入村　佐野安太郎
同　高座郡藤谷村　齋藤省三
兵庫縣八部郡山田村　田中勝次郎
新潟縣三島郡與板町　三輪爲次郎
同　中蒲原郡五泉町　松田彦平
同　南蒲原郡下關村　大竹恒
埼玉縣兒玉郡兒玉町　外　青木政吉
同　同　青柳村　外　金井友吉
埼玉縣兒玉郡兒玉町　木村柳太郎
同　同　青柳村　外　高橋盛太郎
同　同　金屋村　仮島淺吉
同　那珂郡松久村　鈴木彦太郎
千葉縣東葛飾郡馬橋村　齋藤峯吉
栃木縣河內郡本郷村　本田廣吉
長野縣上伊那郡赤穗村　外　赤穗農談會
宮城縣伊具郡角田町　手塚虎治
山形縣米澤市山上通町　辻村知太治
同　同　雄島村　八代重
廣島縣出水郡上田水村　石塚萬之介
山形縣東置賜郡屋代村　金子孫左衛門
計　二十九名

生絲　三等賞

東京府南多摩郡元八王子村　小島太之助
新潟縣刈羽郡上條村　野澤與三左衛門
埼玉縣埼玉郡太田村　並木禎次郎
宮城縣伊具郡丸森村　外　八卷新
同　同　八卷雄三郎
島根縣鹿足郡津和野町　西村時得
計　六名

褒賞贈與式の席に於て佐々木審査委員長の報告岡幹事長の式辭永島受賞人總代の答辭は左の如し

○審査委員長報告

拙者は既に頒白閑散の身となり近來の事情には甚だ疎かりしに豈に圖らんや今般審査委員長の重任を囑托せらるゝの運命に遭遇せり依て幹事長を始め審査員一同の協議を以て審査を遂げたる概略を報告す

本會出品　三百五十五點　出品の人員　二百七十九名

此内細別

蠶種　框製　五十九點　普通製　百零六點　百六十五點　人員　百十三名

繭　白質繭　百六十二點　人員　百三十九名

生絲　捻造　二十點　折返造　六點　島田造　一點　玉絲　一點　二十八點　人員　二十七名

褒賞

蠶種　一等賞　二點　二等賞　十七點　三等賞　廿六點

繭　一等賞　二點　二等賞　十九點　三等賞　三十一點

生絲　一等賞　一點　二等賞　二點　三等賞　六點

○幹事長式辭

不肖毅乏きを幹事長に承け事務員諸君の幇助と審査委員諸君の勤勉とに由り玆に蠶種繭生絲第一回品評會褒賞贈與式を擧行するに至れるは洵に感謝に堪へざるなり顧ふに我大日本蠶絲會は明治二十五年三月の創說に係り爾來四十有五閱月にして會員の數は一千五百有餘名の多きに達せり而して曩には栃木及新潟に支會を設立し今又此品評會を開設するの盛況を致す是固より氣運際會の然らしむる所と雖も抑亦會員諸君が熱心斯業に從事せらるゝの結果ならずんばあらず國家の爲め賀せざるを得ざるなり然りと雖も今日の蠶絲會は事業僅に緒に就きたるのみ前途期する所尙ほ遼遠なりとす豈勉めざるべけんや聊か既往の顚末を叙べ併せて將來の希望に涉り以て式辭に充つ

明治二十八年十一月十七日　大日本蠶絲會幹事長　從六位勳六等　岡　毅

○受賞人總代答辭

維時明治二十八年十一月十七日大日本蠶絲會蠶種繭生絲第一回品評會褒賞贈與式を擧行せらる某等出品人として此式塲に參列するの榮を得剩へ優賞を贈與せらる何の幸か之に加へん自今益々奮ふて業務に從事し以て盛旨に副へんことを期す謹で答辭を呈す

受賞人總代　永島禮七

○審査委員氏名

（いろは順）

審査委員長　名譽會員　佐々木長淳

審査委員　技藝委員　橋木重兵衛

審査委員　技藝委員　今西直次郎

仝　本多岩次郎

審査委員　會員　小野忠太郎　審査委員　技藝委員　芝山直清
仝　技藝委員　田原休之丞　仝　仝　下田伊左衛門
仝　會員　高橋元助　仝　會員　毛呂正容
仝　佐々木重松　仝　仝　守屋慶之
仝　佐藤辰太郎

○寄付金者氏名

左の諸氏は品評會の擧を贊成され頭書の如く寄付されたり

一金貳拾五圓　埼玉縣兒玉郡兒玉町　饒進社
一金五圓　東京府　中村宇左衛門君
一金五圓　東京府會員　高崎治平君
一金五圓　會員　下田伊左衛門君　柳内才次郎君
一金五圓　群馬縣會員　毛呂正容君
一金五圓　同　佐藤國太郎君
一金參圓　長野縣　久保田儀左衛門君
一金參圓　會員　守屋慶之君　高橋元助君　小野忠太郎君
一金壹圓七拾錢　長野縣會員　瀧澤聰吾君
一金六拾錢　群馬縣會員　田中宇三郎君

○小集會に於ける演說者

（次第演說順）

種屋の內幕……永島藏七君
生絲を撚絲として輸出するの利益……橋本重兵衛君
海外に於ける生絲の狀況……金子堅太郎君
日本の蠶絲業に就て……藤田四郎君
九州地方に於ける桑樹萎縮病の調査……堀正太郎君
大日本蠶絲會を觀す……田中芳男君
蠶種合同購求組合の設立を望む……角田喜右作君
第一回品評會の祝辭……佐々木長淳君
以上

◎草野覺德氏飼育の秋蠶繭　長崎縣南高來郡溫泉岳風穴の氷室に貯藏せる秋蠶種を大日本蠶絲會員草野覺德氏は魯桑を以て飼育し其收繭を同會に寄せられたりしが非常の良繭にして色澤鮮麗緊緩其度を得たる等缺點なきを以て之を煮て一粒試驗を行ひたるに果して豫想に違はず其鮮舒の佳良なる一驚を喫する程にて四個の繭共に額節切斷一もあるなく眞に美麗精緻なる良繭雜なりき即ち左表の如し

目標	第一次	第二次	第三次	第四次	平均
回數	五三五回	四四〇回	四四〇回	五〇〇回	四七八回
デニール	三、〇〇	二、七五	三、二五	二、二五	二、八一

右の如くなれば檢尺器四百回に對する纖維は二「デニール」三分五厘にして歐米二洲に輸販する生絲の原料として頗る適當なるものと斷定せられたり

◎奈良縣の春蠶產額　奈良縣に於ける本年春蠶の產額は繭三千七百七十八石、玉繭四百七石、出殼繭六十二石、屑繭百九十三石合計四千四百四十石にして飼養戶數九千五十三戶なり之を前年に比較するに飼養戶數に於て五千百十八戶、繭產額に於て千五百五十四石を增せり斯く飼養戶數の增加したるは一般蠶業の進步と縣廳に於て蠶絲業組合取締規則を發布したるため當業者は大小を論ぜず悉皆該組合に加入したるとに由る而して其戶數の增加せしに拘らず產額の割合之に伴ふて多額ならざりしは是れ些少の飼養家多數を占むるに由れりとぞ

◎青森縣の春蠶景況　青森縣下に於ける本年の春蠶景況を聞くに三齡前は頗る好況を呈し一般に豐作を豫想せしも其後雨濕の害を受け南津輕、三戶、下北郡地方を除く外は上簇不良なりしがため漸く平年作を得たり而して其飼養戶數千五百四戶の掃立蠶種大凡千九百枚の收繭高は繭千三石、玉繭百六十六石、出殼繭二十四石、屑繭九十七石、合計千二百九十石にして之を前年に比し飼養戶數に於て九十餘戶、又收繭に於て八十餘石を增せりといふ

◎島根縣の養蠶景況　島根縣に於ける春蠶は蠶兒發生以來晴天高溫相續きたるを以て發育甚だ速にして頗る好況を呈し桑葉亦一般潤澤なりしが五齡に至り溫度高きに過ぎ且つ蠶蛆の害漸次蔓延せしため多少の違算を見るに至れり然れども本年の氣候は概して近年稀なる好順なりしを以て其收繭は平年を下らざりき而して養蠶家數は二萬八千百六十七戶、收繭高一萬四千九百七石にして之を前年に比較するときは戶數に於て三千二百六十七戶、收繭高に於て三千七百三十七石を增加せり斯の如く本年は戶數の著るく增加せると氣候の適順なりしとに拘らず其割合に收繭額の多からざりしは蓋し前年桑葉の缺乏に苦しみたる者の內幾分か掃立を減じ若くは全く之を廢したる者あるに由れり

◎巖手縣の春蠶景況　巖手縣に於ける本年春蠶の景況は飼養戶數一萬八千八百八十一戶、掃立枚數三萬五千六百五十二枚、繭の數量二萬零七百六十七石、此概價六十萬三千五百二十一圓、玉繭の三千三百十二石、此概價四萬一千四百三十圓、出殼繭の數量五百八十八石、此概價五千五百七十四圓、數量屑繭の數量一千七百零六石、此概價一萬二千五百六十圓なりといふ

◎山口縣下の蠶絲業狀況　在山口町大日本蠶絲會員今井保一郎氏の報道に曰く山口縣即ち周防長門二ヶ國の蠶絲業上に於ける昨明治二十七年末現在調査に據れば製絲所の數十一ヶ所、自宅製絲をなすもの一千八百十一戶にして製絲產額は器械取二千四百八十貫目、坐繰其他七百七十九貫目、熨斗絲、玉絲、屑絲類を合して一千零三十七貫目、眞綿百四十七貫目、蠶種製造家數四百四十一戶、製種枚數二千九百八十五枚、養蠶家數一萬二千六百八十八戶、春蠶收繭額三千二百九十四石、夏秋蠶收繭額一千四百七十八石、桑園段別五百八十二町七段步、見積段別二百四十八町八段步なり而して同縣は

官民共に銳意斯業に向て改進擴張を圖りつゝあれば今より兩三年の後には驚くべき異數の發達を見るに至らんと

◎大分縣の桑畑段別　大分縣に於ける今二十八年六月末日の現在桑畑段別は二千二百九十二町八段歩、見積段別四百十七町二段歩にして之を前年に比すれば桑畑段別四百三十八町九段歩、見積段別八町七段歩を增加せり

◎同功繭を防ぐの手段　同功繭即ち玉繭は蠶業家に取りて損失頗る大なるものなれども之を防禦する方法に於て今日迄の研究にてはまだ滿足すべき効果あるを聞かず而して同功繭結成の原因に關しても其說區々にして或は繭の性質なりといひ或は原種の爲めなりといひ或は上簇の早きに失し又は曉きに失したるに因るといひ其他種々雜多の說あれども其尤も信ずべきに近きものは上簇の時多數の蠶兒を一簇に放解即ち厚揚げするに方り若し氣温著るく高ければ玉繭を結ぶもの多しといふにあり是れ從來老練なる養蠶家の唱道する所にして學者間に於ても研究の價値ありとなせる說なり此說に就て或蠶業家は蠶兒互に營繭を急ぐの結果相共に此處彼處に彷徨して絲纖を徒費し終に共同營繭の已むを得ざるに至れるものとなし之を防禦するの手段として上簇に際し絲纖を徒費せしめざる爲め蔟を適宜の長さに切り之を箔中に散置して絲纖を切斷するの方法を實驗したるに玉繭の歩合著るく減少せりといふ

◎信州伊那に機業起らんとす　養蠶業地として又製絲業地として有名なる長野縣下信州伊那の谷も機業に於ては唯失敗の歷史を有するのみなるが飯田在一の酒造家宮島桂三郎氏は大に憤慨す

る所ありて去る明治二十四年親しく野州足利、上州桐生等の實況を視察し幸に桐生に於て福島幸平氏の贊助を得て歸鄉の上男女二十五名の生徒を募集し之を桐生各有力の機業家に年期約束を以て依賴し今や專ら修業中なるが同氏の熱心なると方法の着實なる爲め大に製絲家の同意を得殊に伊那社長吉澤利八、長信社關川宗三郎、大地主大原慶一、前縣會議員林虎三、其他伊藤儀助、越田綱索、北澤彌平の諸氏最も深く贊成盡力して一大會社を組織せしに目下工業熱否寧ろ機業熱の盛なる時とて意外に多數の應募者を得たるを以て遠からず開業の運びに至るべしとの事なり

◎蠶絲直輸出奬勵法案　同法案は第九議會に各派蠶絲業に關係ある代議士より提出する筈にて本年は是非とも貴衆兩院を通過せしめんとの意氣込みなる由

◎生絲檢査所の位置　來春四月一日より開かるべき横濱、神戸二港に於ける生絲檢査所の位置に就ては主務省に於ても夫々準備中の由なれども横濱には適當の場所に空地もなければ又借入るべき家屋もなく種々詮議の末當時同市に於て共有財産なる元貿易商組合の共同倉庫の空地三百坪を借入れの儀を知事を以て市長へ申入れ去月(十一月)二十九日模本農商務大臣、藤田農商務局長等が横濱に出張したる序を以て佐藤市長に懇談ありたる由なれども奈何せん右の地所は彼の有名なる共有物紛議事件に伴ひ貿易商が市へ讓與の際共同倉庫借受けの條件あるに其間に種々込入りたる所の云ふべからざる事情ありて其貸借の協議未だ纏まらざるより夫が爲め市長も其處分に苦み農商務省も亦殆ど當惑し居れりとの事なり

◎群馬縣蠶種檢査成績　群馬縣蠶種檢査員佐藤辰太郎氏より同縣に於ける製絲用蠶種檢査成績

表を送られたるに由り左に掲ぐ

自着手至十月卅一日製絲用蠶種檢査成績表

		本縣	他府縣	合計
授檢枚數		三〇二、一四三	二二四、三一二	五二六、四五五
合格枚數	顯微鏡檢査	八二、七八二	八六、五四八	一六九、三三〇
	認定檢査	二〇七、〇〇六	一二七、六六一	三三四、六六七
	計	二八九、七八八	二一四、二〇九	五〇三、九九七
不合格枚數		一二、三五五	一〇、一〇三	二二、四五八
顯微鏡檢査枚數		九五、一三七	九六、六五一	一九一、七八八
病毒歩合別枚數	無毒	三六、二四四	四四、六三八	八〇、八八二
	二歩	一七、〇五六	一九、三二一	三六、三七七
	四歩	一二、七〇〇	一一、一四五	二三、八四五
	六歩	九、一六二	七、〇九三	一六、二五五
	八歩	七、六二〇	四、三五一	一一、九七一
	十歩	四、九三九	四、九三一	九、八二〇
	十二歩	三、一六六	二、四三七	五、六〇二
	十四歩	一、九五一	一、四〇〇	三、三五一
	十六歩	一、一五二	七〇五	一、一五七
	十八歩	六八〇	三七一	一、〇五一
	二十歩	四六七	二五九	七二六
	合計	九五、一三七	九六、六五一	一九一、七八八
授檢蠶種口數		三、三四四	四〇三	八、七四七
授檢人員		一、五三四	二、一四五	三、六七九
授檢枚數百枚ニ對スル不合格枚數		四、一	四、五	平均 四、三
授檢枚數百枚ニ對スル合格枚數		九五、六	九五、六	九五、六
顯微鏡檢査枚數百枚ニ對スル不合格枚數		一二、九	一〇、五	一一、七
顯微鏡檢査枚數百枚ニ對スル合格枚數		八七、一	八九、三	八八、二
授檢枚數百枚ニ對スル顯微鏡檢査枚數		三一、〇	四三、〇	三七、〇
檢査員出勤延日數		五、九二二日	檢査員一人一日ノ檢査枚數	八九枚
助手出勤延日數		七、八六四	檢査員一人一日ノ顯微鏡檢査枚數	三二

自着手至十月卅一日原種用蠶種檢査成績表

原種受付蛾數	一一八七、一八六	原種檢査蛾數	三五三、五四五

備考　檢査員一人一日の檢査枚數は總檢査員の出勤延日數を以て製絲用種總授檢枚數を除したるものにして檢査員一人一日の顯微鏡檢査枚數は同上延日數を以て實際顯微鏡檢査の枚數を除したるものなり然れども其實際より云ふときは同延日數中の檢査員を以て次欄に掲けたる如く原種用母蛾の檢査をなしたるものなれば實際の平均枚數は本表掲ぐる所のものより多額なる割合なり

◎廣島縣各郡市養蠶成績　廣島縣にては前年來各郡市に養蠶傳習所を設置し農務局西ヶ原蠶業試驗場の卒業生を招聘して教師となし傳習生を養成せるが下に掲ぐる所の諸表は本年の成績なりとて大日本農會員池田幸之助氏より報道されたるものに係る

郡市名	掃立蟻量	用桑量	蟻量四匁ニ對スル給桑量 一齡	二齡	三齡	四齡	五齡	合計
廣島	一萬〇	五八、九三〇	一、七四六	三、九五六	一〇、九六六	二五、二六八	一六五、七六六	一六五、七六六
安藝	八、七	三八、八六六	九六六	一、九六六	六、四三六	二二、一六八	一四〇、三七八	一四〇、三七八
佐伯	一、三五	五、〇、三四〇	八〇〇	一、四〇〇	七、〇〇〇	二六、四〇〇	一五八、八六〇	一五八、八六〇
沼田	一四、六	六四、三五六	一、二九〇	三、九三〇	八、八四〇	二六、一〇〇	一五八、四〇〇	一五八、四〇〇
高田	一四、〇	六六、七〇八	一、三三〇	三、一六〇	七、八三〇	二六、六〇〇	一四四、四〇〇	一四四、四〇〇
賀茂	一、三八	五、三、四四四	一、六八〇	三、八三〇	一、六八一	五、六六八	二二、一六一	一六八、四四〇
豐田	一、六〇	七六、六七七	一、〇八七	二、六三〇	八、三九九	一六、四〇〇	一三、三六六	一三、三六六
御調	一、六〇	七、四四〇	一、二〇〇	三、六〇〇	九、六〇〇	一八、〇〇〇	一八、三一〇	一八、三一〇
深津	一四、三	九、三、二〇〇	九、三〇〇	二、四四六	六、四〇一	一六、七四四	一四四、八〇五	一四四、八〇五
蘆田	一、六〇	七、四、〇六〇	九、六〇	二、六〇〇	七、〇一〇	一四、六九九	一八二、一三一	一八二、一三一
三次	六四、三六	三、三、四四〇	一、一三〇	三、八一〇	一〇、四〇〇	二三、六四四	一六四、七七〇	一六四、七七〇
三上	一〇、六	五五、九、九四〇	七六	一、三六一	七、八四〇	二六、〇六八	一四、九、六七七	一四、九、六七七

○

郡市名	收繭高容量 上繭同切繭	層繭合計	蟻量四匁ニ對スル收繭高容量 上繭同切繭	層繭合計	蠶種製造高 枠製	普通製
廣島	四、三六 合	四、七六 合	一、二一〇 合	一、七四〇 合	一〇 枚	七 枚
安藝	一、六八	二、九九	四〇〇	一、〇一一	六	一
佐伯	二、四〇	三、二九	一四〇	九六〇	一	一
沼田	四、三八	四、九三	一、一八六	一、四三一	一〇	六
高田	二、六六	四、四四	六六	一、三八	八	一

○

郡市名	收繭高重量 上繭同切繭	層繭合計	蟻量四匁ニ對スル收繭高重量 上繭同切繭	層繭合計
賀茂	三、六六	四六三	九四七	一、三三
豐田	三、六六一	四、八	一、一四	一、四四
御調	四、三〇〇	四、六六	一、一四	一、四四
深津	四、三〇〇	四、三〇	一、一四	一、四四
蘆田	四、三六	四、三四	一、一四	一、四四
三次	三、八〇	三、六〇	一、〇九	一、三四
三上	三、二〇〇	四三	九四一	一、三四

○

郡市名	收繭高重量 上繭同切繭	層繭合計	蟻量四匁ニ對スル收繭高重量 上繭同切繭	層繭合計
廣島	四、六六六	四、六六六	一、一二七	一、一二七
安藝	一、四〇八	一、四〇八	三六六	三六六
佐伯	三、二六〇	三、二六〇	一、〇〇一	一、〇〇一
沼田	四、四四〇	四、四四〇	一、二四一	一、二四一
高田	二、四四〇	二、四四〇	六六〇	六六〇
賀茂	三、四四〇	三、四四〇	一、一四一	一、一四一
豐田	二、六〇〇	二、六〇〇	七四〇	七四〇
御調	三、二〇〇	三、二〇〇	九四〇	九四〇
深津	四、八〇〇	四、八〇〇	一、二一〇	一、二一〇
蘆田	三、四〇〇	三、四〇〇	八六〇	八六〇
三次	三、八〇〇	三、八〇〇	一、〇八〇	一、〇八〇
三上	三、四〇〇	三、四〇〇	一、〇四〇	一、〇四〇

○

給桑百貫目ニ對スル敢蠶高容量

郡市名	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	上蠶同切蠶	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量	同上重量
	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	計	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	計	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	計	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	計
廣島	七〇分	六六	一〇	七六八	六七七	七六七	八〇〇〇	五六四	一〇四	八〇五六	八〇五六	八〇五六
安藝	七六七	六七五	一二	七六七	六七五	七六七	六九三	五六五	一一	六九三	六九三	六九三
佐伯	四八九	四七九	一三	四八九	四七九	四八九	六〇二	五七九	一三	六〇二	六〇二	六〇二
沼田	六三	五五	一五	六三	五五	六三	七一三	六六二	一四	七一三	七一三	七一三
高田	六七	六〇	一六	六七	六〇	六七	八六四	七六〇	一六	八六四	八六四	八六四
賀茂	六四	五六	一八	六四	五六	六四	六四九	五六四	一八	六四九	六四九	六四九
豐田	四二	四一	二〇	四二	四一	四二	五六八	四八一	二〇	五六八	五六八	五六八
御調	五一	五〇	二一	五一	五〇	五一	六一〇	五六六	二一	六一〇	六一〇	六一〇
深津	五七	五六	二二	五七	五六	五七	六一七	五七三	二二	六一七	六一七	六一七
蘆田	五二	五一	二四	五二	五一	五二	六〇六	五六二	二四	六〇六	六〇六	六〇六
三次	五四	四六	二五	五四	四六	五四	七四四	六一二〇	二五	七四四	七四四	七四四
上佐	五六	五五	二六	五六	五五	五六	七四四	六一二〇	二六	七四四	七四四	七四四

○

蠶室內平均溫度（華氏）

郡市名	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	平均
廣島	七五度	七五度	七五度	七五度	七五度	七五度
安藝	七六度	七六度	七六度	七六度	七六度	七六度
佐伯	六七度	七一度	七一度	七〇度	七〇度	七〇度

蠶室外平均溫度（華氏）

郡市名	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	平均
廣島	六一度	六二度	六二度	六二度	六二度	六二度
安藝	六九度	六七度	六七度	六七度	六七度	六七度
佐伯	六一度	七〇度	六七度	六七度	七〇度	六七度

○

飼育日數

郡市名	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	合計
廣島	四日一時	四日一時	五日一時	六日一時	八日一時	三一日一時
安藝	六日一時	四日一時	五日一時	六日一時	八日一時	三一日一時
佐伯	七〇日	五〇日	七一日	七〇日	九〇日	三六〇日
沼田	六一日	六〇日	七一日	七一日	九〇日	三六一日
高田	七〇日	七〇日	七〇日	七〇日	九〇日	三五〇日
賀茂	七〇日	七〇日	七〇日	七〇日	九〇日	三五〇日
豐田	七一日	七一日	七一日	七一日	九〇日	三五一日
御調	七〇日	七〇日	七〇日	七〇日	九〇日	三五〇日
深津	七〇日	七〇日	七〇日	七〇日	九〇日	三五〇日
蘆田	七一日	七一日	七一日	七一日	九一日	三五一日

給桑回數

郡市名	一齢	二齢	三齢	四齢	五齢	合計
廣島	四回	四回	六回	六回	三三	一四三
安藝	五回	五回	六回	六回	三三	一四五
佐伯	六回	七回	七回	七回	四三	一六三
沼田	六回	七回	七回	七回	四三	一六三
高田	七回	七回	七回	七回	四三	一六三
賀茂	七回	七回	七回	七回	四三	一六三
豐田	七回	七回	七回	七回	四三	一六三
御調	七回	七回	七回	七回	四三	一六三
深津	七回	七回	七回	七回	四三	一六三
蘆田	七回	七回	七回	七回	四三	一六三

三次	七、一六	五、三三	六、一八	六、二〇	八、一五	三五、一九	五一	三四	三九	三三	四五	二〇三
三上	七、〇〇	五、〇五	七、〇八	七、一三	七、〇五	四〇、〇六	四八	二六	三五	三三	三五	一七六

◎生絲檢査所技師の任命　大日本蠶絲會幹事仝技藝委員高橋信貞氏は十一月五日農商務技手より生絲檢査所技師に榮進せられ高等官七等に叙し十一級俸を下賜せられ又仝技藝委員にして農商務技手田原休之丞氏及圓中文助氏足立元太郎氏は孰れも十二月三日仝技師に任ぜられ田原圓中の二氏は高等官七等に叙し十一級俸を下賜し足立氏は仝八等に叙し十二級俸を下賜せられたり

◎横濱蠶絲銀行發起人總會　横濱蠶絲外四品取引所の仲買人諸氏は同取引所の機關銀行を創立する計畫あり一昨廿八日の委員會に於て行名は豫記の如く横濱蠶絲銀行と稱し資本金三十萬圓を五十圓券六千株に分ち其三分の二は發起人負擔し殘り三分一の一半は他の仲買人及直取引專業仲買人に他の一半は取引所の株主に割付するとに決したり

◎生絲運搬直上げの拒絶　横濱の各運送業者より此程生絲賣込問屋に向ひ生絲及び附屬品の運賃を一俵に付一圓宛直上せられたしと請求する處ありたるより生絲賣込商組合にては此程の懇話會に於て種々相談する處ありたるが結局運送業者の要求を拒絶する事に決せしを以て月番飯島勇造茂木總兵衛松浦清三頁の三氏より去廿九日右要求は全然容れざる旨回答を爲したる由然れども尚運送業者にして飽く迄も直上げせんとならば此際同業者一同申合せ運搬會社を設立する計畫なりといふ

●第一回品評會出品諸君に鳴謝す

客月十五日より十七日に至る三日間東京市赤坂區赤坂溜池町三會々堂に於て開設したる蠶種、繭、生絲第一回品評會には多々御出品被成下以御蔭會場に光輝を添へ本會の面目之に過ぎず存候謹て鳴謝候也

大日本蠶絲會幹事長　岡　毅

●會員諸君に謹告す

十一月會報即ち本號は疾くに發刊すべきの處同月は第一回品評會の會務蝟集し非常に繁劇を極はめたる爲め大に遷延して遂に今日に至れり實に謝する所を知らず請ふ幸に諒恕せられんことを第四十二號は引續き刊行御送付可致候

大日本蠶絲會

●會費の儀に付稟告す

明二十九年度會費至急御拂込被下度且又是迄會費延滯の諸君には此際併せて御拂込を要し候若し其儀無之に於ては會報發送を停止すべき場合も可有之に付此段豫め稟告す

●特別廣告

◎入會者　左の諸氏は十月より十一月に渉りて通常會員に加入せられたり

東京　田村金十郎　東京　大野傳兵衛　京都　高岡信太郎
同　浦島勇助　京都　谷部直吉　同　居相勝治
同　川窪福次郎　同　草木光太郎　同　岡田克吉
同　市川茂一　同　田中藤助　同　中井繁吉

京都　足立条左衛門　新潟　中村忠七郎　埼玉　市川半次郎
同　森下幾藏　同　山岸繁作　同　淺海磯次郎
同　中西政之助　同　星野源次郎　同　小高保之助
同　桑原増太郎　同　源川忠左衛門　同　法師磯三郎
同　袖長久吉　同　宮原直太郎　同　間川三之助
同　和田政造　同　山崎德三郎　同　山口藤平
同　田中隆之助　同　竹部恒作　同　細井宇之助
同　山本安藏　同　小島三郎　群馬　野村要藏
同　飯田格次郎　埼玉　福島桂三郎　茨城　芽根龜次郎
同　城野仙之助　同　野村總五郎　同　小林由太郎
同　山田常次郎　同　鈴木彦太郎　同　地引要助
神奈川　佐野安太郎　同　倉林周平　愛知　神谷妻三郎
同　齋藥鉦三　同　谷田松之助　靜岡　佐野代次郎
兵庫　本多好之助　同　飯島淺吉　同　源平鶴十郎
同　井上孝三　同　飯島金七郎　長野　越石角五郎
新潟　野上忠太郎　同　茂木福松　同　久保田外治
同　長岡製絲場　同　福島久米吉　福島　森信五郎

福島　森豐藏　富山　根上長次郎　同　高橋眞八
同　鈴木啓助　同　林昌作　同　綾田梶太
同　安藤竹三郎　同　松本七兵衛　高知　坂本巖
岩手　岩龜半藏　廣島　桑田敬一　大分　吉崎虎造
同　吉田官介　山口　中村正路　佐賀　江口茂一郎
山形　辻村知太治　同　福江精一郎　熊本　長野順藏
富山　宮田長藏　香川　岡野郡府中村　勸業會　同　古莊之
同　長尾利吉

計　八十五名

右の内にて田村　市川（茂一）大野　谷部　田中（隆之助）山本　佐野　野上　淺海　小高　細井　小林　地引　源平　安藤　岩龜　辻村　坂本　江口　長野の十九氏は各自に申込まれ　浦島　川窪　法師の三氏は高崎治平氏　草木外十一氏及井上氏は山本竹藏氏　飯田外二氏は高乘増太郎氏　齋藤氏は橋本重兵衛氏　木多氏は四村幸太郎氏　長岡製絲場は菊田利右衛門氏　中村外七氏は新潟支會　福島氏は柴生田忠三郎氏　野村外七氏は青木淺次郎氏　市川（半次郎）氏は淺見倉吉氏　間川氏は下田伊左衛門氏　山口氏は榎本宗助氏　野村氏は町田菊次郎氏　芽根氏は久保田松吉氏　神谷氏は町田治助氏　佐野氏は岩濱爲治氏　越石氏は大越七郎左衛門氏　久保田氏は高橋信貞氏　森外二氏は遠藤清吉氏　吉田氏は松田宗兵衛氏　宮田外四氏は長瀬脩平氏　桑田氏は小野和一氏　中村外一氏は今井保一郎氏　勸業會外二氏は多賀甚太郎氏　吉崎氏は太田武彦氏　古莊氏は木村三次郎氏孰れも紹介せられたり

◎死亡者　左の三氏は去る九月及十月中死亡せられたり

新潟　馬場猶太郎　同　星名桂太郎　同　中林長右衛門

●質問者の注意

質問書は半紙又は美濃紙を用ひ必ず一紙に一件を限り其字躰は成るべく楷書或は行書にて明瞭に認め且其住所氏名を明記せらるべし

大日本蠶絲會

明治二十八年三月改正

●大日本蠶絲會規則

右刷成に付御要望の諸君は郵便切手貳錢を添へて其旨本會へ御申越あるべし直ちに送附す

大日本蠶絲會

本報廣告料　一行五號活字廿二字詰前金八錢三十行以上は割引すべし

本報定價　一冊　前金拾貳錢　一ヶ年分　前金壹圓貳拾錢

●原種用夏蠶種青熟

一升の繭二百九十位にして強壯無類

●原種用春蠶改良純白

一升の繭二百五十五位にして普通純白に比し飼育大に易し●右蛾躰檢査濟のもの●夏蠶は壹蛾壹錢貳厘●純白は壹蛾壹錢八厘百蛾以上販賣す●遞送費百蛾八錢

明治廿八年十月

茨城縣結城郡上山川村

大日本蠶絲會員　櫻井佐十郎

大日本蠶絲會報告　第三號

右入用に候間該號餘分に御所持の御方は相當の代價を以て御讓り願度若し會員諸君にして拙者の微意御承諾の御方は郵便稅先拂を以て御通報奉願候

東京農事試驗場

堀　正太郎